

# ヒロシマナガサキ (WHITE LIGHT / BLACK RAIN)

2007(平成19)年6月6日鑑賞(松竹試写室)

★★★★



監督・製作・編集＝スティーヴン・オカザキ／証言者(14名)＝居森清子、笹森恵子、中沢啓治、田中ヤスヨと岡チエミ、下平作江、吉田勝二、坪井直、肥田舜太郎、深堀悟、金判連、永野悦子、山口仙二、谷口稜嘩／アメリカ人(4名)＝モリス・ジェプソン、ローレンス・ジョンストン、ハロルド・アグニュー、セオドア・“ダッチ”・バン・カーク(シグロ・ザジフィルムズ配給／2007年アメリカ映画／86分)

……広島・長崎への原爆投下から62年。日系3世のスティーヴン・オカザキ監督は、「今、作らなければ……」「今、伝えなければ……」との思いから、14名の被爆者たちの証言とともに、私たちがこれまで観たことのないようなフィルムや写真を一挙大公開！ そのキーワードは、驚き、衝撃そして感動……。 「1945年8月6日は何の日ですか？」との質問に答えられない若者たち必見の映画だが……。

## スティーヴン・オカザキ監督とは……？

プレスシートによれば、この映画を監督・製作・編集したスティーヴン・オカザキ監督は1952年生まれの日系3世で、アメリカのカリフォルニア州ヴェニスで育ち、現在は妻と娘と共にカリフォルニア州パークレーに住んでいるとのこと。また、広島・長崎とは何の関係もなく、母方の家族は四国の八幡浜出身で、父方の家族は茨城県の水戸出身だが、英訳『はだしのゲン』を読み広島、長崎の原爆投下に関心を深めたとのこと。そのため、ドキュメンタリー監督として生きてきた彼は、被爆者自身が体験を語るはじめての英語圏のドキュメンタリー作品『Survivors(生存者たち)』(82年)を製作し、以降も数々の問題提起作を発表してきたとのこと。

そんなスティーヴン・オカザキ監督にとって、この『ヒロシマナガサキ』は25年間ずっとつくりようとしていたもので、彼の広島・長崎の原爆問題の集大成ともいえるべき作品。なぜ今、広島・長崎の原爆被害についてのドキュメンタリー映画が……？ そ



©2007 Home Box Office, Inc. All rights reserved

れは「今、作らなければ」、そして「今、伝えなければ」ということ。1945年から62年を経た現在、被爆体験を自らの口で語ることができる人が激減しているのは当然。そんな今、被爆者14名の証言を、1億3千万人の日本人はどのように受け止めるのだろうか……？

## 1945年8月6日を知らない若者たち

映画の冒頭、平和で豊かな現在のニッポンの若者たちの姿が映し出される。音楽を楽しみ、ショッピングを楽しみ、おしゃれを楽しみながらまちを歩く若者たち……。スティーヴン・オカザキ監督は、そんな若者たちに対して何の前触れもなく、「1945年8月6日は何があった日か知っているか？」という質問を。するとその答えは驚くべきことに（イヤ、当然予想されるとおり？）、「ええ～、わかんない……」というもの。安倍晋三首相の肝入りで教育再生会議が設置され、さまざまな提言がなされようとしているが、そんな議論はさておき、「こんな日本に誰がした！」、思わずそう叫びたくなったのは私だけ……？

## 是非、広島平和記念資料館の見学を

広島市の平和記念公園の中にある平和記念資料館は国民必見の資料館。この中を約1時間見学すれば、「1945・8・6」を知らない若者たちも人生観が大きく変わるはず。私は昨年と今年の2回、広島高裁での事件にくっつけてその見学をしたが、見学する

たびに新たな思いがこみ上げてくるもの。

この映画には、そこで私が見た絵や写真がたくさん使われているが、そういうナマの資料をこの映画のスクリーンを通して観るだけでも大きな価値がある。しかし、まだ平和記念資料館を見学していない若者は、是非その見学を……。

## なぜこんなフィルムや写真が……？

この映画を観てビックリしたのは、一体こんなフィルムや写真をどこから入手したのだろうと思うような資料がいっぱいだったこと。被爆直後の広島・長崎の惨状を撮影した写真は資料館内に展示されているが、それ以外の貴重なフィルムや写真が14名の被爆者の証言とともに次々とスクリーン上に……。

14名の証言者はみんな広島・長崎での直接の被爆者ばかりで、生死の境目をかいくぐった重傷者や、顔が黒こげになったり、顔の片側と耳に大きな損傷を受けた人たちもいる。被爆62年を経た今は、治療の甲斐あってその外貌は多少改善しているが、この映画に登場する治療中のフィルムや写真を見ると、とにかく想像を絶するひどいもの。よくもまあ、こんな姿をスクリーンに出すことを承諾したものだと思ったが、それは逆に、被爆者たちにしてみればまさに「今、語らなければ、今、伝えなければ……」との思いだったよう……？

そこで印象に残るのが、プレスシートにあるスティーヴン・オカザキ監督の「私たちは30人のインタビューを撮影し、最終的に14人の証言を使いました。私は自分たちの貴重な時間を割いて家に招き入れて下さり、率直な対応をしてくださった全てのみなさんに感謝しています」という謝辞の中にある、「この作品の中で、登場する人々はとても率直で、自分たちに何が起きたかについて話をしたがっていましたが、物語を共有したかったです。私たちは誰一人、説得はしていません」という文章。被爆者たちの心の叫びを、私たちは心して、今聞かなければ……。

## 『はだしのゲン』も是非

1973年から『週刊少年ジャンプ』に連載され始めた『はだしのゲン』を私が読んだのは修習生時代だが、その強烈なインパクトは今でもよく覚えている。そこで、その著者である中沢啓治氏が被爆者の1人としてスクリーン上に登場してきたのにはビックリ。



©2007 Home Box Office, Inc. All rights reserved

スティーヴン・オカザキ監督は、「大江健三郎の『ヒロシマ・ノート』、森下一徹の写真集『被爆者たち』、中沢啓治の『はだしのゲン』の3冊の本がヒロシマナガサキを理解するために役立ちました」と述べているが、今の時代の若者たちに1番わかりやすく原爆の被害をアピールできるのは、きっとこの『はだしのゲン』だろう。したがって、こんな映画が上映されるのを機会に、是非この本を若者たちに読んでもらいたいものだが……。

## 95歳の新藤兼人監督に期待！

私がいつも読んでいる日本経済新聞の「私の履歴書」に、2007年5月から映画監督であり脚本家の新藤兼人氏が執筆していた。彼は広島県の生まれで、1945年8月15日の終戦は宝塚の海軍航空隊で迎えたとのこと。したがって、直接の被爆体験はないものの、原爆被害をアピールしなければとの思いから、1952年に『原爆の子』を発表し、アメリカの圧力を受けながらも各種の賞を受賞した。さらに1959年には『第五福竜丸』を発表するなどしながら、今や日本の巨匠に……。

そんな新藤兼人監督は今、「元水兵」という戦争体験を基に『陸に上がった軍艦』の脚本を書き、自ら出演しているとのこと。その公開は今年の夏だが、その時彼は95歳になっているというからすごいもの。彼が今そんな『陸に上がった軍艦』の製作に意欲を燃やしているのも、スティーヴン・オカザキ監督と同じように「今、作らなけ

れば……」「今、伝えなければ……」との思いからであることは明らか。

現在95歳の新藤兼人監督に比べれば、今、吉永小百合主演で『母べえ』を撮っている75歳の山田洋次監督なんかしょんべんたれ？　すると、58歳の私を含む団塊世代なんかは、まだホンのネンネ？　したがって、「疲れた」などと言わず、しっかりあの戦争について、またヒロシマナガサキについて考え、発言していかなければ……。

## キーワードは驚き、衝撃、感動

私が最近観たドキュメンタリー映画の傑作は、『蟻の兵隊』(05年)、『シネマルーム11』149頁参照)、『エンロン』(05年)、『シネマルーム12』378頁参照)、『ディア・ピョンヤン』(05年)、『シネマルーム12』392頁参照)の3本。このような社会派ドキュメンタリー映画は監督の製作意図が明確だから、その主義主張への賛否は別として、そのメッセージ性に大きなインパクトを受けるもの。

ところが、大いに感動したこの『ヒロシマナガサキ』について、スティーヴン・オカザキ監督は「私はメッセージ映画には興味はありません。例え、それが良いメッセージを伝えるものであっても」と述べ、また「ナレーションやコメント、学術的、政治的な解釈は一切ありません。あるのは、14人の被爆者(広島6人、長崎8人)の体験だけです」と述べている。つまり、広島・長崎での被爆を伝えるについては、登場人物やアクションそのものに物語を語らせれば良いと考えているわけだ。

もっとも、誤解してはならないのは、そうだからといって映像技術上のテクニックが不要というわけではなく、被爆者たちに何をどう語らせ、それをどのように観客に伝えていくのかはすべて監督の手腕。それを前提としたうえで、スティーヴン・オカザキ監督がキーワードとしてあげるのは、驚き、衝撃、感動の3つ。そこであなたにも、驚き、衝撃、感動に満ちた被爆者たちの証言に、じっくりと耳を傾けてもらいたいものだが……。

2007(平成19)年6月7日記